

Englishは英語？米語？あるいは？ 「O-BOX 4号」の父母アンケートから考える

父母アンケートの「自由記入欄」が詳細に紹介されていて、興味深く読みました。その中で次のような記述がありました。

「外国人(オーストラリア人)講師による英語のクラスで発音をオージーイングリッシュにいちいち直させるのは何故か知りたい。」

本校の当該場面を見たことはないのですが、三重県の中学校で英語の研究授業を観た時、「オーカイ」をALTが多用するので「はてな？」と思っていましたが、途中でALTがオーストラリア出身者であることに気づき合点がいきました。

ネット上では<often>の<t>を発音するALTに違和感を持つという投稿があり、British Englishに影響を強く受けたオージーイングリッシュでは<t>を発音することがある、米語、英語ともに<t>を入れない発音が多用されてきたが、教養のある人の間では<t>を入れる発音が一般的という説明もあります。

私が気になったのは、中学校まで米語が中心の教科書の授業で米語がEnglishであると思い込んでいること、言葉は生き物であり世界には様々なEnglishがあるという認識のもとに学ぶ必要があるのではないかということです。もちろん、第2言語として学習する場合は「共通語」を学ぶのが確実でしょう。ただ、生の言語と接するとその多様性を理解していないと困るのではないかとも思います。

英語に関して素人のつぶやきです。

<私の言語ショック① 秋田弁>

研究のために初めて秋田市を訪れた時、研究会場が住所しか書いてないので道行く人に尋ねました。皆さん親切に「それなば????」と指さして教えてくれるのですが聞き取れません。やむなくその方向に進み、角があると他の人に聞くのを続けました。二人の婦警さんと出会い、やっと思ったら「それなば～」で結局1時間近く会場の周りを歩き回ることになりました。

<私の言語ショック② サンフランシスコからセントルイスへ>

サンフランシスコに着いて3日目、耳の栓が抜けたように米語が耳に入り昔取った杵柄だと思っ
ていまし。が、セントルイスに入った途端、巻き舌米語に大苦戦しました。秋田下町弁の語尾の「はっ」や尾鷲弁語尾の「さな」と同じように、巻き舌部分が耳について肝心の中身が耳に入らないのです。

<私の言語ショック③ セネガルの女教師のフランス語>

オーストリアで開催されたフレネ教師世界交流集会の分科会でのこと。メキシコやブラジル、イギリス、フランス、セネガル、ブルガリアそして日本の参加者。ハワというセネガルの若い女教師がレポートをしたのですが、彼女の話すフランス語の語気が強く、とても聞き取りにくいので隣のフランスの教師に「あなた理解できますか？」と尋ねたら「ノン」。帰国後調べたらフランスの植民地だったセネガルの首都ダッカで話される<wolof français>であることを知りました。

以前、井上ひさしの『吉里吉里人』を読んだ時、吉里吉里地方が共和国として独立し日本標準語が「外国語」に、吉里吉里弁が「国語」になるというパラダイム転換がなされ、「標準語」が「ズーズー弁」に翻訳される顛末に爆笑しました。(石田あゆみの「ブルーライトヨコハマ」は傑作です。)

教科横断授業の中で、英語科と国語科のクロス授業で「コトバ」あるいは「言語」などというのはできませんかね？